

学習者の多様性を生かしながら、インクルーシブな日本語教育を目指す —ホリスティックな学習ツールとしての日本語ポートフォリオの可能性を探る—

Toward Diversity and Inclusion: Portfolios as a Holistic Tool to Enhance Language Learning in Class

ここ数年、社会の分断化の加速が深刻な問題になっている一方で、教育は、あくまでインクルーシブであるべきという動向も強まっている。日本語教育においては、多様性を受け入れるための取り組みが、インクルーシブ教育として強調されがちのようであるが、クラス内にすでに存在している多様性を認識し、日本語を学ぶという共通の目的の下、個々の多様な表現ができる安全な場所や機会を作ることも大切なのではないだろうか。

筆者は、多様性の表現の試みとして、学習者による多読本作成を続けている。これは、学習者らしさを生かした多様性の表現とその発信の取り組みであり、多読教材の中では越境多読本として非母語話者の日本語の価値が示唆されている（高橋, 2017, 2018）。だが、クラス内での根本的な多様性への取り組みとしては、学習者にとって、より持続的で包括的な方法も必要であろう。そこで、本発表では、多様性の表現方法として、ホリスティックな学習ツールとしての日本語ポートフォリオの可能性を提案する。

本発表の日本語ポートフォリオの背景には、昨年、本大学の学部専攻学生の学習の到達度を、大学と学部の教育目標に関連させながら、どのように評価したらよいかという話し合いが持たれたことにある。特に、学習者それぞれの多様な言語学習経験をどう評価するのかという点では、試験や発表ではなく、ポートフォリオから3年間必修の言語学習を質的に評価することで合意した。そのため、日本語1年生コース（秋学期29名、春学期23名）で試験的にポートフォリオを取り入れることになった。

青木(2011)は、学習オートノミーを育てる目的で作成した「日本ポートフォリオ」は、学習進歩の可視化や内省する習慣づけにも肯定的であったと報告している。また、ポートフォリオは初級学習者に好意的に受け止められ、特に教室外での自律的学習活動を促す役目を果たしたとも報告されている（松井・西山 2015）。

本コースでは、Google Driveで、青木の「日本語ポートフォリオ」(2006)を参考に、デジタルポートフォリオを作成した。自己評価の項目として、1) Plan-Do-See という学習計画、評価の指針、反省、2) CEFRに基づくJFスタンダードを参考に、本大学のカリキュラムに合わせた Can-do statement についての自己評価、3) MBL の大谷選手も学生時代に使ったというマンダラチャート、4) 日本語、日本文化活動の記録、5) 日本語での産出物の5項目から構成されている。また、Google Drive の機能を利用して、学生同士が閲覧しあえるようにし、自分のポートフォリオをクラスで紹介する機会も設けた。

秋学期終了の時点で、個々のポートフォリオには、学習嗜好、目標と反省に加え、学習者の動機や興味、母語や学習障害の特徴に合わせた、多様な日本語学習の取り組みが現れた。教師と学生の対話の場では、ポートフォリオの存在が対話に方向性を与えた。学期末のアンケート結果（回答者数22名、データは質的分析をもとに考察）からは、学生の多くがクラスのポートフォリオの多様さに刺激を受け、学習の仕方を学び合い、それぞれの日本語学習への熱意に賛同的であることが伺われた。

このように、ポートフォリオは、自己学習管理ツールとしてだけでなく、シェアすることで学生間の多様性の気づき、そこからの学び合いの姿勢を促す役目を担い、教師にとっても、より客観的で包括的な学生支援に役立てられる可能性があることが示された。クラス内の学習者の多様性を生かしながら、学生たちの共存と学び合いを支援するツールとして、ポートフォリオは、今後のインクルーシブな日本語教育の発展に貢献できるのではないかと考える。